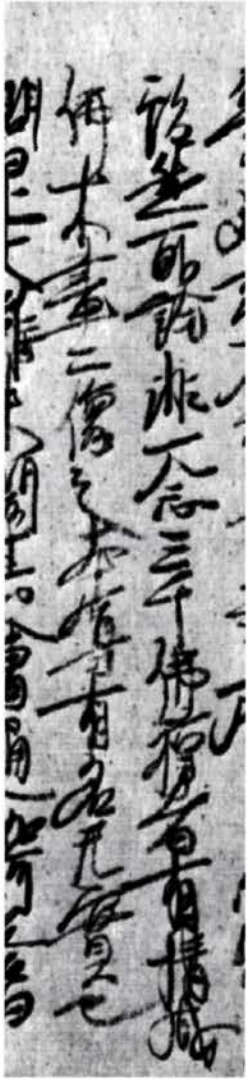




今月の御聖訓



(雖<sup>モ</sup>然<sup>リ</sup>ト所<sup>レ</sup>ハ詮<sup>ズ</sup>ル、非<sup>ザ</sup>レバ一念三千ノ仏種ニ者、有情ノ成)

(仏、木画二像ノ之本尊ハ有名無実ナリ也。)

仏、木画二像の本尊は有名無実なり。

【観心本尊抄 全集二四六頁】

目次

今月の御聖訓

卷頭言	菅野憲道	1
【講義】「末法適時の御本尊とは(つづき)」	菅野憲道	2
御書と日興上人[187]	松田銘道	4
【所感】「伝承の地を訪ねて思うこと」	森 秀之	6
読書案内『文学は予言する』	松田銘道	9
【旅行記】「小笠原の思い出」	井元恵子	10
【著名画家による大聖人画】 [33]		14
【題詞】		15

四月の行事 卯月詠草 恵日俳壇

お講講話(要旨)

拝読御書

「本尊問答抄」

(全集三六五頁)

## 末法適時の本尊

(つづき)

菅野憲道

## 《仏像造立は大聖人の本尊にあらず》

大聖人の御一代の行業において、御自ら顕された御本尊は御自筆の曼荼羅本尊以外にないという事実こそが大事なのです。諸御書に示された御本尊に関する教説は、須くこの御自筆の御本尊に対する説明であるとみれば、あらゆる疑問も氷解するのです。

これに対し御書の断章要文を集め、これを自己の先入観に沿って好都合な部分のみを取捨して。あるいは御書の所対をわきまえず、強引な会通を加えるなど、現在行われている教学の手法では、「木を見て森を見ず」の愚に陥って、宗祖の御本意に適うことは難しいのではないのでしょうか。

また、造仏派のよりどころとしては、富木氏、四条氏、日眼女の釈迦仏一休像造立の例をもって造仏の根拠とするのが常談です。しかし、この造仏の例のうち、日眼女(四条頼基の妻)の場合三寸というから懐中仏のような小さな釈尊一休像であり、お守り、もしくは愛玩品のような趣向をもったものである

うから、堂宇や道場に安置する本尊の標準にはなりえませんが、ところで大聖人に帰依した檀越の数は、建長の頃に入信された富木氏を始めとして、二百数十名くらいでしょうか、弾圧や迫害で退転した人もいたでしょうから、その数を正確に計るのは困難です。その人々の旧来の信仰は、阿仏房のように念仏宗系からの改宗が多かったと思われませんが、天台、真言、修験などから帰依した人々がいたことは確かです。

この檀越の方々には身代の大小の差はあれ、邸内などに持仏堂(といっても独立した堂宇ばかりでなく邸内の一室を充てた仏間形式や付属する建物など)が設けられていたようです。そうするとその持仏堂には当初は何を本尊として安置していたのでしょうか。また後に曼荼羅本尊を授与して頂いたとき、それまで祀っていた本尊や脇立等はどうしたのでしょうか。鍋冠日親の「伝灯抄」では日尊門流の雲州馬木の大坊や平田の法華堂はもと念仏の寺で、法華宗に改宗してからも阿弥陀三尊はそのままだに仏壇の周りを障子を立て並べ、その表面に御本尊を懸けていた」と記録していますが、改宗したからと言って、即刻これ

まで持ち伝えてきた神仏等に執着せず処分するようなことは稀だったと思われます。日蓮宗にありがちな雑乱勸請もこうした、改宗以前の執着が一因になっていることが考えられます。

「観心本尊抄」は文永十年四月二十六日の御著作、佐渡始頭の曼荼羅本尊は同年七月八日の御図頭です。文永十年巳前は十界互具の曼荼羅本尊の儀相が調わず、素朴な一遍首題の本尊でした。実際に、宗祖御図頭の十界互具の本尊が、広く弟子檀那にも授与されるようになったのは、現存例から考えて、身延隠栖期の建治・弘安になってからのことです。

### 《富木殿の一尊四士》

具体的に富木氏の例で考えて見ましょう。当初は念仏者であった富木氏は、建長五年頃に日蓮大聖人に帰依してからは持仏堂で大師講を営んで、大聖人の教化のもとに法華経および天台の三大部の要文などを学習していたようです。そのため天台大師の画像なども当時から所蔵されています。

つぎに前述の通り、富木氏は文永七年頃と推定される時期に、所領内にあった真間の堂（後の弘法寺）の本尊として釈迦仏一休像を造立しました。これを大聖人にお知らせして頂いた御返事が「真間釈迦仏御供養逐状」だということになります。この御消息文には造立した釈迦像について連絡役だった義子の伊予日頂を導師として急ぎ法華経を読み入れて開眼供養をするよう指南されております。この文面からは釈迦像を新造したことは分かりませんが、それ以前には何を本尊として祀っていたのか分

かりません。傷んだ釈迦像を新造したものとも考えられます。

この時の仏像は研究者による近年の調査によれば、鎌倉時代の釈尊坐像で、その後、間を置いて四菩薩が脇士として新たに造立され、一尊四士として一具の仏像が宝殿中に祀られて伝えられてきたと判明したそうです。

このことは、日興上人の「富士一跡門徒存知事」にも、

「一、伊与阿闍梨ノ下総ノ国真間堂一休佛也。而去年月盜取テ日興カ義ニ造ニ副ノ四脇士ニ。彼ノ菩薩ノ像ハ宝冠形也。」

とあってピッタリ符合したのです。この他にも八件におよぶ一尊四士造立の情報日興上人でなければ知り得ないもので、本書の信憑性をも物語っているのです。

一方、近世初頭の弘法寺由緒「真間山伝灯記」では本像を「四菩薩造立抄」と結びつけて、その仏像が大聖人の御意に基づく日本最初の一尊四士像としている。一尊四士の本尊建立が宗祖の始唱か、否かは別の機会に譲ることとして、「四菩薩造立抄」は、弘法寺が「本化四大士は如来滅後木画像の濫觴」（伝灯抄）と誇るために作られた偽書の疑い濃厚なものと思えます。「富士一跡門徒存知事」には、

「日興云、於三聖人御立ノ法門ニ者、全以三絵像木像ノ仏菩薩ニ不レ為ニ本尊ニ。唯任ニ御書ノ意ニ以ニ妙法蓮華経ノ五字ニ可レ為ニ本尊ニ、即チ自筆ノ本尊是也。」

日興上人の御意は全く、仏菩薩像を本尊とせず、唯妙法蓮華経の五字をもって本尊とすべしとあり遺誠はゆるぎません。一休仏に四菩薩を造り添えたことはやむなき善巧方便なのです。

（つづく）

〔御書と日興上人（一八七）〕

## 「立正安国論」書写と「安国論問答」（一二一）

松田 銘道

前回は『システム辞書』の「本尊」の

項目の、「⑦建治から弘安の境目頃を契機として、宗祖の本尊意識が积尊本尊より曼茶羅本尊へと変化したと見ることも可能」との見解について、都守基一氏の

「講演要旨『三大秘法について』」では、近代の日蓮宗の解釈と、それとは異なる、「『本尊問答抄』の法本尊・題目本尊こそ宗祖の正意であり、ここに弘安期の法

義的新展開がある」との、山上弘道氏の見解にも注視していることについて見て

きました。今回は、都守氏が注視した山上氏の、

①「日蓮大聖人の思想（六）」（『興風』十六号）

②「日蓮大聖人曼茶羅本尊の相貌変化と法義的意義について」（『興風』十七号）

以上の二つの論文について見ていきます。

①では、宗祖の「身延後期（弘安元年九月の『本尊問答抄』から御入滅まで）の思想」について考察しています。

まず、『本尊問答抄』を身延後期の思想の起点とすることについて、

・「この頃から思想面のみならず、たとえば花押が劇的に変化するなど多方面にわたって変化が認められる」こと。

・「熱原法難や弘安の役を媒介とし、身延前期の思想と比して、大きな変化があった」。

以上の変化が認められるとし、また、その変化は「具体的にどのようなものである」かについて、「法華経の題目を本尊とす―『本尊問答抄』を中心として」、

「熱原法難について」、「末法教主の自覚」との項目を設け、詳細な考察を行っ

ています。

さらに、「本章の結論」では、まず、「第一 身延後期の思想の総括」との項目を設け、

・「第一に『本尊問答抄』を基点として、それまでの本門の教主积尊を中心とした本尊観から、法華経の題目を中心に据えた本尊観に移行展開していることがあげられる。それは仏的存在である积尊を相対化した上での、法たる題目を中心に据えた本尊観であり、具体的には曼茶羅本尊―それも法義的に完成された曼茶羅本尊を意味している」。

・「第二に、熱原法難を媒介として、逆縁世界に基軸をおいた法義が展開されることが表明されている」。

・「第三に、『諫曉八幡抄』に見られる、末法の教主たる自覚が宣言されている」。

以上のように、「积尊の相対化」、「逆縁世界」、「末法の教主たる自覚」という法義の変化がある、との見解を示しています。

次に、「本章の結論」では、「第一本尊の相貌と法義」との項目を設け、「法義的に完成された曼茶羅本尊」について、『日蓮聖人真蹟集成』第十卷（昭和五十二

年）

年）

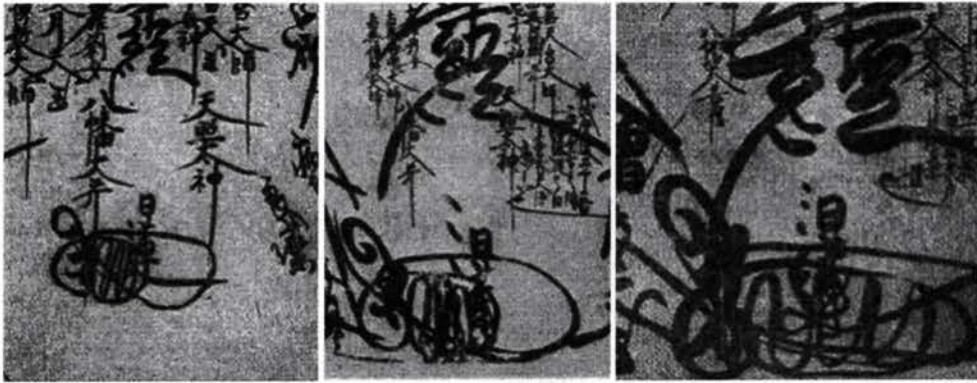
年）

年）

年）

年）

年）



左：『日蓮聖人真蹟集成』第十巻に収録のNo.49の御本尊（岩本・実相寺蔵）。当本尊までは首題の「経」と署名の「日蓮（花押）」が離れている。

中：『日蓮聖人真蹟集成』第十巻に収録のNo.50の御本尊（京都・頂妙寺蔵）。当本尊以後、首題の「経」と署名の「日蓮（花押）」の位置が定まる。

右：『日蓮聖人真蹟集成』第十巻に収録のNo.83の御本尊（鎌倉・妙本寺蔵）。当本尊以後、署名の「日蓮（花押）」が大きくなり、首題と一体となる。

年十二月二十五日）の「本尊集解説」を参照にして、  
 ① 番号11番文永十一年六月日本尊より総帰命式が多いが、それは番号24番文永

十二年卯月日本尊をもって終る。

② 文永十一年かと思われる番号18番本尊には両界の大日如来が配されている。

③ 番号31番建治二年二月日本尊より、それまで左右に離れていた署名花押

が結合して、これ以降離れず。

④ 当初より基本的に配されてきた十方分身諸仏及び善徳仏が、番号46番建治三年十一月日本尊をもって排除される。

⑤ 番号49番弘安元年七月日本尊より、花押変化する。

⑥ 番号50番弘安元年七月五日本尊より、図頭讀文の字句が定型化する。

以上のような曼荼羅の相貌の変化について検証し、そのことから、  
 ・「曼荼羅本尊が次第に相貌を整え、定型化していく様子を伺うことができる」。

・「たとえば当初に配されていた迹仏が消えていくこと」や「花押の変化など」、「その変化は法義の進化に伴うものであることがわかる」。

・「つまり本尊の相貌の変化は、大型

人の法義の展開や変化を反映している」。

このように、「本尊の相貌の変化」と「法義の展開や変化」の関連性を指摘しています。また、「弘安元年以前に多くの基本的な変化が見られ、弘安二年頃に相貌がほぼ一定すること」について、

・「弘安元年以前の変化は、大聖人の法義が試行錯誤を繰り返しながら徐々に成熟されていることを示すもの」。

・「弘安元年から二年頃に安定するのは、法義が成就安定していくことを示すもの」。

このように、「法義が成就決定」を示している、と指摘しています。

さらに、「番号83番弘安三年卯月十日本尊あたりから、ことに署名花押が大きくなり、題目と一体となって」いくのは、

・「末法逆縁世界が題目中心であること」。  
 ・「同時に自身その末法逆縁世界の教主であることを示すものではあるまいか」。

すなわち、「逆縁世界」への対応と「末法の教主」との自覚が示されている、との見解を示しています。②では、「曼荼羅本尊」の変化等に関して、さらに詳細な考察が行われています。（続く）



誓いの井戸全景

二月中旬に、伊勢市の伊勢神宮外宮近くにある法務局へ行く用事でありました。そのついでに、大聖人様が遊学を終え

【所感】

伝承の地を訪ねて思うこと

大阪地区 森 秀之

て、建長五年四月二十八日に立宗宣言する前の、関東下向途中に伊勢倭（やまと）町の天台宗寺院、旧常明寺（現在は）に参籠し、伊勢神宮に参つたと伝えられている地に行ってきました。

その地には、現在誓いの井戸（三大誓願）といわれる井戸、誓願塔、石造宝塔がありました。

誓願塔には、

「日蓮三大誓願 宗門発祥聖地」

と書かれた札が掲げられています。

大聖人様の誓願といえは、「開目抄」の「三大誓願」、

「我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ、等



誓いの井戸

とちかいし願、やぶるべからず。）全集二三二頁）

ですが、「開目抄」は一二七一年十一月から翌二月に掛けて著されましたが、その十八年前に、この伊勢の地で誓願をたてていたとの伝説で、その真偽は別としても興味がひかれます。

明治維新の神仏分離政策で、常明寺は廃寺となり、一時荒廃していましたが、

大正十三年に、伊賀上野出身の貿易商・川合芳次郎という方が境内を整備し、現在は日蓮宗の三重県の宗務所が管理しているようです。

大聖人様の聖跡を訪ねると解ることは、殆どが明治以降に整備されているということですが、私は、戦前の日蓮主義流行の影響が多分にあると感じるとともに、荒唐無稽なスーパーマン的な大聖人観があったり、何か大聖人様の信仰精神を感じること等が、入り交じっていると思います。



誓願塔には「開目抄」の三大誓願が…

それは何故かという検証をすれば、「法門申さるべき様の事」(眞蹟・中山法華経寺蔵)には、  
「例せば国民たりし清盛入道、王法をかたぶけたてまつり、結句は山王大仏殿をやきはらいしかば、天照太神・正八幡・山王等よりき」

胡散臭い聖跡地から、真実に近いものまで目にして、自分がどのように感じるかを、その場に立って体験するするのも大事ではないかと、最近 생각합니다。

そういう意味では、今回の伊勢神宮に立ち寄ったという伝説については興味深いですが、私の率直な感想としては、大聖人様は伊勢神宮には立ち寄っていないのではないかと思います。



川合芳次郎

与力)せさせ給ひて、源頼義が末の頼朝に仰せ下して、平家をほろぼされて国土安穩なりき」(全集一二七二頁)とあって、東条の御厨は源頼朝が寄進したものであり、そのことから大聖人様は天照大神が住んでいるとの認識をもっていたと思います。

また、「新尼御前御返事」(身延曾存)の一説にも、

「而るを安房の国東条郷は辺国なれども日本国の中心のごとし。其の故は天照太神跡を垂れ給へり。昔は伊勢国に

跡を垂れさせ給ひてこそありしかども、

国王は八幡・加茂等を御帰依深くありて、天照太神の御帰依浅かりしかば、太神曠りおぼせし時、源右將軍と申せし人、御起請文をもつて、あをか（會加）の小大夫に仰せつけて頂戴し、伊勢の外宮にしのびをさめしかば、太神の御心に叶はせ給ひけるかの故に、日本を手ににぎる將軍となり給ひぬ。此の人東条郡を天照太神の御栖と定めさせ給ふ。されば此の太神は伊勢の国にはをはしまさず、安房国東条の郡にすませ給ふか。例せば八幡大菩薩は昔は西府にをはせしかども、中比は山城国男山に移り給ひ、今は相州鎌倉鶴が岡に栖み給ふ。これもかくのごとし。」

（全集八八頁）

とあって、この説では、源頼朝が平家を破つて將軍になった一つの勝因として、東条の御厨を天照大神に寄進したことを挙げて、それが神意に叶つたと考察して

います。

八幡大菩薩についても、昔は太宰府から山城の国の男山へうつり、そして鎌倉の鶴岡八幡宮に住している。天照太神も同様に、伊勢の国から遷り東条の郡が日本を中心でもあり、住み給うとあります。これら二つの遺文の内容からすると、

建長五年以前の鎌倉幕府成立時から、八幡大菩薩は鶴岡八幡宮に住し、天照大神は東条の御厨に住している、と述べられています。

ですから、大聖人はわざわざ伊勢神宮には参ることはなかったのではないか、強いていえば、天台寺院であつた常明寺には参籠したかもしれない、という方が妥当ではないかと、私は思いました。

また、この二つの御書の全文を無視して、このような切り文をもつて、大聖人様が天照大神・八幡大菩薩については、実在した神のような表現になっていますが、これをもつて批判者は、非科学的な

神の存在を信じているように扇動される方もおられるようですし、大石寺でも明治の頃まで天主堂、垂迹堂という堂があつたのを、神社参拝を禁じているのにそのような堂を作つて参拝させていた、と信仰の大綱を無視して非難される方もおられます。

これも私見ですが、大聖人様の表現は、信者さんを南無妙法蓮華經への信心決定に覚醒させる比喻の意をもつて、源頼朝が平家を滅ぼしたことについて、当時の日本人が慕っていた、神々の加護があつたとの表現であり、信仰においては曼荼羅本尊への一心の信仰が肝要であるという旨の論点が肝要であり、その大綱を無視している批判には、誤魔化されたくないのだということに気づかされます。縷々述べましたが、改めて日興門流の神天上の法門を学び精進していききたいものです。

本書は、図書館の新刊コーナーで出会った。タイトルの「予言」という文字が目に入り、同時に、文学は一体何を予言しているのだろうか、という興味がわいてきた。また、著者の紹介には、『嵐が丘』『風と共に去りぬ』『灯台』等の古典作品の新訳などを手がけた翻訳家であり、『謎とき』『風と共に去りぬ』などの著書も多数と紹介されていた。

かつて読んだそれらの名作との縁も深まったような気がして、早速読み始めた。

「はじめに」には、

「この二十年ほど、新聞や文芸誌に書評や時評を執筆するうちに、自分のなかで個々の原稿が互いに連携し反応しあうようになり、いくつかの大きな主題が浮かんできた。それが、「デイストピア」「ウーマンフッド」「他者」という三つだった。」

と、著者がこれまで執筆してきたことが、連携し反応しあい、三つの問題意識をもたらししてくれた、と綴っている。

三つの問題意識が、これまで多くの文学作品を深読みしてきたことから生み出されたことは、目次からも窺える。

読書案内

松田 銘道

鴻巣友季子  
文学は予言する

“未来”は小説に書かれていた。  
トランプ政権を先取りした『侍女の物語』  
性加害の構造を描いた18世紀『少女文学』  
英語一語時代を語るが『生まれつき翻訳』  
100分 de フェミニズム  
アトウッドの村田沙耶香まで  
世界と文学の最新情報  
新編選書

鴻巣友季子 著  
『文学は予言する』

新潮社  
定価 一七六〇円

本書は、「デイストピア」「ウーマンフッド」「他者」の三つの問題意識がそのまま章立てとなっている。

一章では、「『侍女の物語』の描く危機は三十五年かけて発見された」など六つのテーマが、二章には「舌を抜かれる女たち」など六つのテーマが、三章には「パンデミックの世界に響く詩の言葉」など九つのテーマを設けて、三つの問題を解明している。

そこで取り扱っている作品も、海外の話題作のみならず、村田沙耶香著『コンビン人間』、川上未映子著『夏物語り』、多和田葉子著『百年の散歩』、同『地球にちりばめられて』など、日本の作品も多い。それらの作品が勝れた翻訳者によって諸外国で高い評価を受けていることを、三つの問題意識から注目している。

さらに、これまで「デイストピア」の解釈が曖昧になりがちだったのを、「徹底した管理監視社会、全体主義社会」、「寡頭独裁政治」、「統制がきびしいため表向きは秩序だった平穏な生活」と定義しているが、それが本書のタイトルの「予言」の意味とも関連している。

【旅行記】

小笠原の思い出

槻木地区 井元恵子

昨年の一月の終わりから二月の頭に

けて、会社のリフレッシュ休暇を利用して、小笠原諸島に主人と行ってきました。

小笠原諸島に行くには、東京の港区にある竹芝桟橋から出るフェリーに乗らないといけません。まずフェリーに乗るには、一週間前にPCR検査の手続きを送ってもらい、乗船の七十二時間前の陰性証明を持っていかないと、絶対に船には乗れません。それを聞いて、逆に船に乗れば安心だと思いました。

小笠原行きのフェリーは、竹芝桟橋を朝の十一時に出港するため、伊丹空港から羽田空港行きの七時の飛行機に乗る必要があり、私は朝は体調が悪い時が多く不安でしたが、家を余裕を持って五時過ぎに出発しましたが、途中何度もトイレに駆け込み、空港に着いたのは十分前で

した。

もう間に合わない！と思いましたが、

そこは流石のANAで、

「慌てなくても間に合いますよ」

と言っていたいただき、安心して搭乗できました。

余談ですが、過去にビーチで同じことがあり、三十分前に関空に着きましたが乗れなかった経験があったため、また今回も二回分の飛行機代を払うのかと思いましたが助かりました。無事にフェリーに乗船できた時は、本当にホッとしました。

小笠原行きのフェリーは、「おがさわら丸」といい、東京の竹芝桟橋を十一時に出発します。小笠原の父島には次の日の十一時に着くため、二十四時間フェリーに乗っています。二十四時間乗って

るならと、ツインの個室でのんびり行きました。(フェリー代は結構高く、二等で片道三万円、割と安価なツインの個室も、一人あたり六万円は超えます。往復だと一人十三万。涙……)

フェリーは父島に着いたら、三日間父島に停泊し、東京に戻ります(小笠原も東京ですが。笑)そのため本島から行って帰ってくるだけで、最短で五日かかるとのこと。

一週間しか休みのない私には、小笠原村の滞在日数は、約三日間でした。

一日目は、母島へ行くことにしました。父島から母島まで約五十kmあり、母島へは父島からフェリーで二時間です。「おがさわら丸」が父島に十一時に着くと、同じ港から母島行きの「ははじ丸」という名のフェリーが十二時に出ます。

お弁当を売店で買い、昼食を取ったら直ぐに出発です。本島から二十六時間、家を出て約三十時間で、やっと母島に着きました。

徒歩で民宿へ。夕食まで時間があるため、原付を四時間五〇〇円でレンタルし、母島一周の旅スタート。と、いろいろ所



小笠原諸島・南島にて

ですが、母島のメイン道路は、母島のど真ん中の山の中を南北に一本あるだけです。それを原付でウィーンと出発。南の島といえ二月の頭、原付でパーカーだけを着ていたもので、寒いなんの、途中で小雨も降ってきて震えました。でも、山の上からの母島の海は、曇っていてもとても綺麗で最高でした。

二日目は、母島を知りたいのでガイドさんをお願いし、ネイチャーツアーです。時間があるなら山の中へトレッキングを

すれば、母島にしかない動植物などを沢山見られたと思います。十四時に父島行きのフェリーに乗るため、車で移動しながら、固有種をいくつか案内してもらいました。

一見椰子の木なのかと思いましたが、マルハチというシダ類の木が生い茂っています。木の肌に漢数字の八を逆さまにして丸で囲んでいるため、マルハチという名前だそうです。

次に、ハハジマメグロという小鳥です。メジロという鳥は、皆さんもご存じだと思います。メジロより一回り小さな目の周りが黒い、うぐいす色の鳥で母島だけに生息しています。とても可愛いです。

その後、戦跡などを見ながらグルッと周り、連れていってくれたのはヘリポート。なぜ？、ガイドさんの説明によると、診療所はあるのですが、診療所では手に負えない大きな怪我や病気は、ヘリで東京に向かうのだそうで、それがどうしたということですが、そのヘリは二二〇キロ南に離れた硫黄島から来る、海上自衛隊のヘリで、それに乗って、また硫黄島に戻り、さらにそこから大きな飛行機

に乗り換え、都内の病院に九〜十時間かけて搬送するのだそう。怪我や病気になるのも命がけ、とガイドさんは言っていました。

十四時のフェリーに乗って、父島に戻ったのは十六時です。予約していたナイトツアーのガイドさんが、迎えてくれました。

父島の夜、どこに何をしに行くのか。先ず向かったのは、展望台から見る海に沈むサンセット。三六〇度何もない太平洋のド真ん中、太陽の光がオレンジに変わり海も同じオレンジ、順にオレンジから赤、紫から紺色に変わっていき、沈んでいきました。感動でした。思わず南無妙法蓮華経と唱えていました。朝日や夕日を見つめていると、お題目を唱える習慣があるようです。

その後は、小笠原の固有種であるオガサワラオオコウモリをウォッチングして、夜の山の中に入っていきました。ライトを消すと、目を開けているのにも係わらず真っ暗で、本当に目を開けているかを手で確認したくらいです。

見上げると、目の悪い私にも降り注ぐ

くらいの満天の星。ずっと見上げていた  
いくらい綺麗でしたが、ずっと真上を見  
てると、三半規管の弱い私は目眩がする  
のですが、目眩と戦いながら見つめてい  
ました。

最後に連れて行ってもらったのは港で  
す。入り江を見ると、そこには何とサ  
メ！。三匹も！。他にはイソギンチャク、  
スズキなどのお魚が泳いでいました。

以前、近くに料亭があつて、残飯を海  
に捨てていたので、その残飯を食べに来  
ていたのだそうですが、今もそのまま来  
ているとのこと。

すぐそこにサメが普通に泳いでいるの  
です。なぜ一緒に泳いでいる魚を食べな  
いのかはわからないそうです。食事を済  
ませ、天皇陛下もお泊まりになったホテ  
ル（父島の唯一ホテルらしいホテルは、  
ここしかない）に行きチェックイン。

三日目、上陸期間が決まっている南島  
と、ホエールウォッチングツアーに参加  
するため、港に朝七時半に集合し八時に  
小型船に乗船。冬の海は荒波のため高潮  
なので、船が波の上を飛んでいるように  
感じ、そのしぶきが来るわ来るわ。もう

びしょびしょです。

先ずは、クジラを探します。二月は出  
産・子育ての時期で、一カ月くらいは母  
親と子どもが小笠原諸島にいるそうです。

日本各地の和歌山や沖縄などもそうで  
すね。母子が子育てしている時に、オス  
クジラが母クジラ目当てに寄ってくるら  
しく、そのオス鯨のことをエスコートと  
呼んでいました。

外海に出ると、アチコチでクジラの呼  
吸のためのブロー（潮吹き）が見られま  
した。遠目のブローで、姿がなかなか見  
られずにいると、段々と海面を跳ぶ（ブ  
リーチング）クジラがいることが確認で  
き、ワクワク感が増した時、船の目の前  
を子どもものクジラ（それでも大きいです  
が）が通り、母クジラが子どもクジラを  
追いかけて、約十三歳のエスコートが、私  
たちの船の下を通りました！。その時船  
長が、「怖っ」と言っていたのが忘れら  
れません。もしそのまま浮上していたら  
転覆！と思ったそうです。

そうとも知らず私たちは、こんなに終  
始笑顔でいられるのか、と思うくらい楽  
しかったです。

南島は、天然記念物の動植物が多く、  
砂浜に入る時は履いているものを脱ぎ、  
裸足で歩きました。そこにはカタツムリ  
マイマイの殻などが白浜にあり、扇形の  
ビーチなど、映画に出てくるような綺麗  
な島でした。

三日目が終わり、食事をするため居酒  
屋へ行き、小笠原ならではのものを注文。  
何だと思えますか？、ウミガメです。

小笠原では、昔からウミガメを食べて  
いたそうで、全国を見てもウミガメを食  
べられるのは小笠原だけで、他では禁止  
されています。煮込みと刺身があり、煮  
込みは脂が結構あるとのこと、私には  
脂質制限があるため、刺身にしました。  
見た目は馬肉に近く、味はマグロと馬肉  
をミックスしたような、淡泊な味で美味  
しかったです。

四日目、最終日のこの日は、十五時にフ  
エリーに乗るため、朝から戦跡ツアーに出  
ました。小笠原諸島は、戦地にはなりませ  
んでしたが、硫黄島から東京に向かう戦闘  
機が小笠原諸島の上空を飛び、いつか上陸  
されると思いながら、日本軍が三千人もあ  
の小さな島に潜伏していたそうです。

海に沈んだ船や基地跡や、かまどなどの食事をしていたのであろう山の中の跡、大砲などがありました。

ほとんどの方が戦死をされたそうですが、戦死といっても戦ったわけでなく、食料がないための餓死だったそうです。

いつの時代も、戦争は悲劇しか生まない、ウクライナのことも早く終戦してほしいと、改めて思いました。

この後、山に登り山頂で珈琲をいただき、素敵な父島を見渡して下山し、帰りのフェリーに乗りました。

帰りのフェリーは、小笠原名物の小笠原村民のお見送りが圧巻でした。

港にも人が沢山出ており、私たちが乗ったフェリーに、小型船が何艘も併走して、みんなが「いってらっしゃい」「また、帰ってこいよ」と送ってくれ、見送りの船から何人も海に飛び込むのです。

すごく幸せな旅でした。夢のような南国。コロナ渦でなかったら海外旅行をしていたと思うので、逆に安全な小笠原諸島に行けてよかったです。

小笠原諸島とは、東京から南東に一〇〇kmの太平洋上にある、三十余りの島

からなる群島です。三七〇〇〜二八〇〇万年前に隆起して出来たのが始まりだそうです。一度も大陸と繋がっていないので、固有種が多くみられ、「東洋のガラパゴス」と言われています。二〇一一年には、世界自然遺産に登録されています。

ここに人が住むようになったのは、江戸時代だそうで、地球規模から考えると大分最近の話になります。小笠原諸島は、日本で唯一オセアニア地区に所属しており、フィジー、ポリネシア、ミクロネシアと同じ南国の島で、梅雨がなく一年中過ごしやすい気候です。この小笠原諸島に魅せられ、沢山の方が移住しています。今回、三人と一グループのガイドさんをお願いしましたが、その方たちも同じように移住者でした。

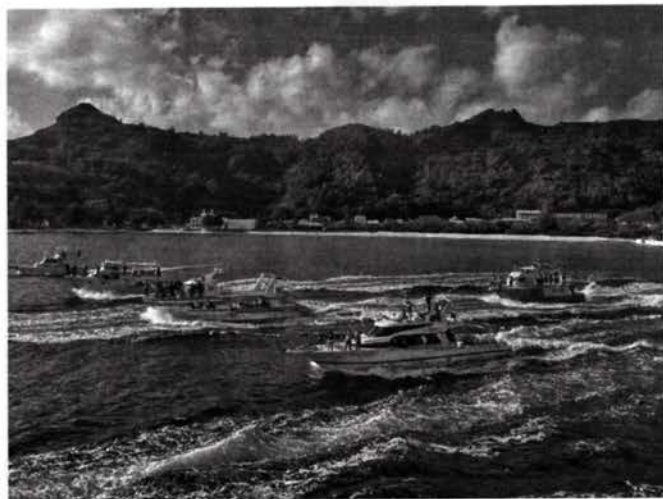
小笠原の父島には、唯一のお寺があるそうです。葬式など困っていると聞き、二〇一五年に浄土宗のお坊さんが、これまた移住してきています。

一般的に宗教は、とにかく何でもいと思われているので、小笠原の方々は安心されたと思いますが、小笠原で亡くなったほぼ全員の方が、念仏で見送られる

だと思つと残念な気がします。仕方のないことかも知れませんが……。

そう思うと、私は両親のお陰で自然と南無妙法蓮華經と唱えられる環境で生まれたことに感謝し、大事に守っていきたいと思うばかりです。

「善知識に値ふ事が第一の難き事なり。されば仏は善知識に値ふ事をば一眼のかめの浮き木に入り、梵天より糸を下して大地の針の目に入るたとへ給へり」  
（「三三藏祈雨事」全集一四六八頁）



島民あげてのお見送りに大感激

〔著名画家による大聖人画〕〔33〕

長谷川等伯彩色 「日蓮上人坐像」



長谷川等伯：天文八年（一五三九）〜慶長十五年（一六一〇）安土桃山時代〜江戸時代初期の代表的な絵師。初期は信春と号した。代表作の東京国立博物館所蔵の「松林図屏風一双」は、あまりにも有名。

能登（現・石川県七尾市）に生まれる。はじめ長谷川信春を名乗り、仏画などを描いていたが、のち三〇歳を過ぎて上洛して狩野派など諸派の画風を学び、千利休や豊臣秀吉らに重用された。当時の主流であった狩野派に対して、長谷川派の長として独自の画風を確立。長谷川久蔵ら四人の息子も長谷川派の絵師となった。

京都本法寺を拠点にした熱心な法華信者であった。

（石川県七尾市・本延寺所蔵）



恵日だより

春季彼岸会 法要

三月十九日(日)～二十一日(火)

今年はお彼岸前は、寒の戻りや雨の日が続いていましたが、お彼岸に入ると一転し春の陽気で天候に恵まれました。

今年も十九日(日)から二十一日(火)の午前と午後に分けて、法華講の地区ごとに奉修されました。

この度の彼岸会は、コロナでのマスクの着用が、三月十三日から個人の判断になったことから、源立寺でも法要への参加の際のマスク着用を個人の判断とした中で行われましたが、参詣者はすべてマスク着用での法要となりました。お彼岸初日の兵庫地区の法要は、午前十時半から奉修さ

お焼香をされるご住職 (春季彼岸会)



ご住職の講話を聴聞 (春季彼岸会)

れ、出仕鈴とともに出仕されたご住職により、献膳、読経、焼香、唱題、回向と如法に進められ、参詣した檀信徒が、それぞれ有縁の故人や先祖の霊を偲びつつ、お焼香・ご回向をしました。

その後、引き続きご住職よりお彼岸に当たり講話があり、法要は無事終了しました。

◆各地区の奉修日は次の通り。

19日(日) 午前十時半 兵庫地区

午後一時 北摂地区

20日(月) 午後一時 大阪地区

21日(火) 午前十時半 槻木地区

午後一時 豊能地区

### お誕生会

二月十二日(日) 午後一時

寒暖差の激しい日が入れ替わりとなつて体調を維持するのが難しい日が続きましたが、この日は朝から好天の、御誕生会となりました。

宗祖日蓮大聖人御生誕八〇二年のこの日、午後一時から第二日曜日の月例お講にあわせて、御誕生会が奉修されました。

法要は、マスクをされた方々が厳肅に唱題される中、出仕鈴が打たれると、出仕されたご住職によつて献膳がなされ、その後、法要は如法に進められ、読経唱題が終了後、「四条金吾殿御返事」を引用しながら、法華経が説く「衆生所遊楽」とは、いかなるご不幸に直面した時にも、お題目を一心に唱える事によつて安心立命の境地が保て、やすやすと乗り越えていける信心

### 【卯月詠草】

末の娘が せがめるまゝに よもぎ摘む

身も心にも 春陽を受けて

コロラドの 友を迎ふる 我が実家に

若人集ふ 歌と笑ひと

〔和風〕

紙魚の香の のこれる文宮に 見出たる

天保生まれの 曾祖母が筆蹟(妙猶ばあさん)

永らへて 六十の賀を 詠める祖母

おさな心に のこるかんばせ

〔故奥はつ〕

### 【恵日俳壇】

春宵の厨に光る充電器

浮初うきはつの川へ落ゆく種浸し

〔農婦〕

一本の梅の香りが山覆う

鶯も香りに誘われ一休み

山歩きホホケキョウに足軽く

〔森 秀之〕



修行が肝要との、法話がありました。

【お詫びと訂正】

※先月号恵日便の、御誕生会の記事に誤りがありました。お詫びして訂正・再掲いたします。

## 立宗会・お虫払い法要

本年の立宗会は、四月二十八日(金)午前十時より奉修いたします。

立宗会は、末法の御本仏日蓮大聖人が安房清澄山にて南無妙法蓮華經の宗旨建立を宣言された建長五年(一一五三)四月二十八日を記念して御報恩のために奉修される法要です。

また立宗会に引き続き、久しぶりに什宝お虫払い法要も奉修します。当山所蔵

の御本尊や古文書等を拝観に供しますが、一日限りとなりますので、檀信徒の皆様には、この機会を逃さぬよう、ご参詣・ご拝観下さい。

※なお、お虫払いは降雨により中止になる場合がありますのでご了承下さい。また、警固の関係から一般の方の拝観は事前の許可者に限ります。

## 法華經の名品展示

28・29日

なお、今年度は特別に法華經の名品展

## 第五十一回源立寺法華講總會のご案内

法華講の皆様にはご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、左記の通り第五十一回源立寺法華講總會が開催されます。

また、総会後に、第十一回源立寺新菩提寺建立護持会の報告があります。

講中の皆さまには万障お繰り合わせの上、御参詣・ご出席下さるようご案内いたします。

記

日時 五月十四日(日) 午後一時～三時三十分

会場 源立寺本堂

講演 秋田県美郷町 妙行院 渡辺道也 尊師

示を同時に本堂にて多数展示します。複製が大半ですが。日本の歴史に登場する名品の数々を身近かにご覧いただけます。二十八・二十九日限りの展示ですが、またない機会ですので、ご家族お揃いで、またはお誘い合わせてのご参観をお薦めします。こちらの展示は晴れ雨に関わらず、翌二十九日(土)の午後四時まで展示します。(二十九日は一般も参観可)

## 《法華經の名品展示の一部》

- \* 注法華經(日蓮大聖人御持經)
- \* 法華義疏(聖徳太子筆)
- \* 扇面法華經(国宝・四天王寺)
- \* 平家納經 序品・観音品
- \* 裝飾法華經(授記品伝久能寺經)
- \* チベット經(經切二紙)
- \* 貝多羅葉經一卷
- \* 高麗大藏經(法華經)
- \* 法華經奥書(楠正成書写)
- \* 国訳妙法蓮華經(宮沢賢治遺贈本)
- \* 法華經八卷(荒木清勇寄進)
- \* 法華經八卷(清野謙次書写)
- \* 深草瑞光寺版法華經
- \* 日相本法華經
- \* 慈海宋順版法華經
- \* 延暦寺金銅經箱(横川如法堂出土)
- \* 仮名書き法華經 柳枝軒
- \* その他瓦經、經筒、ミニ法華經、宗門の古經本等

## 四月の行事

- 一日(土) 午後二時 お経日
- 二日(日) 午前九時 講中勤行会・幹事会  
午前十一時半 法華講入講式
- 九日(日) 午後一時 お講・役員会
- 十三日(木) 午後一時 お講
- 二十八日(金) 午前十時 立宗会・お虫払い

※諸行事に、中止・変更等があります。くれぐれもご注意下さい。

※五月号の継命・恵日発送(4月末)は、  
「北摂」地区が担当です。  
六月号の継命・恵日発送(5月末)は、  
「豊能」地区が担当です。

## ◆マスクの着用について

三月十三日(月)より、義務化されていたマスク着用が、個人の判断に任せられることになりました。

それに伴いまして、源立寺においての各種法要・行事への参加の際のマスク着用につきましても、講員各位の判断にお任せすることといたします。

講員各位におかれましては、よろしくお願  
いいたします。  
源立寺

### 恵日

令和五年四月号 通巻三三九号  
令和五年四月一日発行

編集兼  
発行人

菅野 憲道

恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内

TEL (072) 751-3335

E-Mail kanno@ombat.zaq.ne.jp

購読料(含送料)年間二〇〇〇円

加入者名 恵日編集室会計

〒振替 口座番号 0138012112649